

浮世絵にみる母と子の図像

—喜多川歌麿と寛政期の出版統制を中心に—

洲脇 朝佳 國學院大學

近年、日本美術にみる子どもの図像に特化した研究が始まりつつある。中世から近世にかけて制作された絵巻物や屏風、浮世絵版画などを中心に分析が行われ、その図像的変遷や着想の源泉、当時の子ども観が徐々に明らかになってきている。収集されたそれらの図像の中には、子どもの傍らで世話に勤しむ母の姿が多く確認される。日本美術史上、母子の日常を本格的に主題化したのは18世紀半ばで、とりわけ浮世絵に顕著に認められる。これは同時代の他の文化圏と比しても特異な題材であり、日本美術を特徴づける重要な画題であると指摘できる。しかし従来、母子の図像を体系的に整理し評価づける試みはされてこなかった。本発表では、浮世絵版画の母子図、即ち母子の生活風俗に主眼の置かれた一枚絵を取り上げ、日本における母子図の特質を明らかにする。なかでも、その画題確立に寄与した喜多川歌麿を軸に、図像の成立とその展開、さらに受容者について考察を行う。

喜多川歌麿(1753?-1806)は、吉原遊女や市井の女性を描く美人絵師として浮世絵の黄金期を支えた。先行研究において、その最盛期は寛政(1789-1801)中期頃と評価され、その時期を中心に調査が進む一方、制作活動の後期にあたる寛政後期以降については未だに詳細な論考が出されていない。発表者の注目している歌麿の母子図は、まさにその寛政後期以降に数多く制作されている。そもそも浮世絵の母子図は錦絵の誕生した明和期(1764-72)に成立し、以降、美人画を得意とする絵師の手によって制作された。発表者は現在900点余りの子どもを描いた作例を収集し、その中から約300点の母子図を確認しているが、その変遷を辿ると、実質上、母子図を一画題として確立させたのが歌麿であることが判明する。歌麿以降にその作画量が多くなる点、加えて菊川英山や溪斎英泉、歌川国貞、国芳など直接の師弟関係にない絵師らも、歌麿から題材や図像の着想を得て制作を行っている点からも明らかである。

従来、歌麿の母子図は、寛政の改革下で発布された出版統制令との連関の中で語られることが多く、その制作動機については、描ける対象や主題が限定された中での窮策と消極的に捉えられる傾向にあった。しかし、統制がいよいよ厳しくなる前から、既に歌麿は母子を題材とした絵を手掛けている。その点も勘案すると、女性の内面や日常生活に垣間見える美を描出しようとした歌麿が、「子を持つ母」という卑近で普遍的な題材に辿り着くのはごく自然な流れであったのではないだろうか。発表者は、むしろ統制を機に、母子図を展開することで歌麿が美人画の画域を広げたという点を明らかにする。また、浮世絵に主題面・技術面で影響を与えた中国民間版画や浮世絵の子ども図を考慮しつつ、母子の図像における吉祥性を検討し、その機能を明らかにすることで受容者についても一考する。

(すわき・あさか)